

國學院大學學術情報リポジトリ

〔インタビュー〕 道標：川合康三氏

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川合, 康三, 赤井, 益久, Kawai, Kozo, Akai, Masuhisa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000487

「インタビュー」道標

元國學院大學文学部教授
國學院大學大学院兼任講師

川合康三氏

川合康三氏は昭和二十三年静岡県浜松市生まれ。昭和五十一年

年京都大学大学院博士課程中退、博士(文学)、専攻は中国古典文学。東北大学文学部、京都大学文学部、台湾大学招聘教授、ブランダイス大学招聘教授、國學院大學文学部を経て、現在は、京都大学名誉教授・國學院大學大学院兼任講師。著書は、『中国のアルバ 系譜の詩学』『中国古典文学彷徨』『曹操 矛を横たえて詩を賦す』『杜甫』『桃源郷 中国の楽園思想』『漢詩のレッスン』『生と死のことは 中国の名言を読む』、編著は、『隋書経籍志詳攷』『文選詩編』などがある。本インタビューでは、人文学の現状から、翻訳の諸問題、古典を読むこと、さらには、読書会の効能などについて、お話をいただいた。

（インタビュアー） 赤井益久文学部教授

一、普遍性と独自性——人文学の危機的状况に面して——

赤井 川合先生は今年ご定年で退職されるということで、これまで東北大学、京都大学、國學院大學、それ以外にもたくさん
の大学、研究機関で講義をされて来られました。昔の学生と今の
学生を比べてもあまり意味はないと思いますが、何か定年を
迎えるにあたって感慨等ございますか。

川合 難しい質問をいきなりされましたけれども、学生に聞いているえば、ここの大学は中国文学科にたくさんさんの学生が毎年入ってくるという。これは大変有難いし、珍しいことだと思えますが、一般的にはどんどん減っているわけですね。特に院生が減っている、これは危機的な状況だと思います。

赤井 少なくとも私どもが学生の頃から比べても全体に思想、哲学、文学に関しては相対的に数は減っているのではないかなと思います。したがって、学会へのインパクトも少なくなっていると思いますね。川合先生は日本中国学会の理事長を務めていらつしやいました。私も理事を務めておりますが、全体の会員数もご指摘のように減っているわけで、留学生、外国人研究者の数は相対的に以前に比べて増えていると思います。

川合 國學院はそういう減少がないように思うのですが、国立大学の場合は日本人の院生が少ないので中国人の院生で埋め合わせをしているという面があつて、必ずしもこれは望ましいことではないと思います。ただこれは、中国文学、中国学に限ったことではなくて、全体に文学部が地盤沈下といいますが、相対的に昔ほど榮えていないところがありますね。

赤井 そうですね。國學院は人文社会系しかない大学ですので、一方では大学全体としてもそれに対して危機感をもっています。ですから人文社会科学系の復興といましようか、そういうものを大学全体としても法人としても掲げているわけです。特に國學院は国学を標榜する大学です。國學院の国学を標榜するというのはただ単に自分のところだけを研究すればいいというのではなくて、漢学を批判原理、あるいはヨーロッパの学問

を批判原理として国学というものを比較研究上に明らかにしていこうというスタンスが昔からあります。そういう意味では國學院の中国文学研究あるいは漢学研究というのは普遍的なものと、独自性といましようか、國學院ならではのスタンスがあつていいと思うのですが、中国文学や中国思想、文化を学ぼうえでの普遍性と個別性といましようか、そういうものについて特にお考え等があればお聞かせください。

川合 國學院大學の個別性というか特色については赤井先生がとても詳しいはずで、私は三年半しかここにおりませんけれども、確かにひとつの学風が確固としてあると。それは大切にしていただきたいなあと 생각합니다。赤井先生は学長(インタビュー当時)の立場から人文文学の危機的状況は國學院にも押し寄せているとおっしゃいましたが、私から見るとここは天国というか楽園みたいな所で、国立大学では教師の定員削減が厳しくて定年で辞めた先生のをあとを補充できないわけです。どんどん教師が減っていく。したがって学生も減っていく。学生が減ると教師を採れないという悪循環に陥っています。それが國學院の場合は本当に恵まれた環境にあると私などは思いました。

赤井 若い先生方にそれを自覚してほしいですね(笑)。今普遍性と独自性ということでお伺いして、國學院の独自性という

のは十分にあるというご指摘でしたけれども、中国文学なり中国思想を勉強する場合には、フランス人がそれを勉強してもドイツ人やイギリス人が勉強しても日本人がそれを勉強しても同じスタンスで研究するという立場と、日本には国学がなぜ意識されたかという長い漢学の伝統があったわけですね。その漢学の伝統の中から国学が析出されてきたといった方がいいでしょうか、そういう面で見ますと、独自性、國學院の学風の独自性ではなくて、日本文化における漢学の独自性といましようか、それがひとつ育まれてきたのが独自の手法といましようか、流儀といましようか、それは訓読という学問の一つの流儀作法というものがあります。

『東方学』の最新号だと思いますが、京都大学の名誉教授の木田章義先生が『日本の学問と訓読』という非常に面白い論文を発表されています。この木田先生は国語学で、訓読というとどちらかというと国語学の調点研究だとか国語研究でずっと追われてきたんですが、一方で私どもは、自分たちが研究対象とするものにアプローチするときに、もちろん今の中国文学科でもそうですが、中国語はもちろん必修で課しますけれども、同時に訓読というのは中高生から徐々に親しみだしてきます。ですから、そういう意味での訓読のスタイルは、日本人が漢学や

中国文学を研究するときのひとつの入口といましようか、とつかかりといつてもいいと思うので、この辺について先生のお考えはいかがでしょうか。

川合 訓読というのは日本人の知恵で長い時間をかけて中国の古典、中国の詩文ですね、文語の読み方を文法的にも正確に、かつ日本語にしてそのまま日本語としても理解できるという、こういう大変すばらしい発明だとは思いますが。その訓読を通しての中国の詩文といまものが、ひとつ大事なことは日本語の中に生きているというか、日本語の一部になっている。これは外国文学、外国語ということではなくて、日本語としても大事なものである、これは押さえておかないといけないと思います。有難いことは訓読があるので原文の手触り、これがそのまま意味を日本語で理解しつつ原文の手触りも味わえるという、これはほかにないと思うのです。

例えば我々がフランスの詩を読むとき日本語で読む、これは全くの日本文学であって手触りが全くわからないわけです。漢文学だけは原文に直接触れることができる、これは大変有難いことで、日本人はその有利な今までの蓄積を活かさないのはもったいないと思います。ただ半面、デメリットというかマイナスの面もありまして、ひとつは漢文学の場合は翻訳というものが

非常に未熟であるということ。つまり翻訳する必要がなかったわけです。訓読文にそのまま触ってわかってしまうから翻訳が発達しなかったという、これは一つのデメリットといえると思うのですが、これからはそれでいけるかどうかという問題があります。つまり訓読の日本語がそれこそ古臭くなってしまつて、今の若い人にはそのまま日本語としては理解しにくくなつていく。そういう伝統を伝えたいですけども、それが若い人たちにとつても文学として直接味わたるためには生きた日本語として新しい翻訳が必要になるのではないかと思います。

赤井 おっしゃるとおりだと思います。もちろん中国文学科の学生は訓練をしますので卒業までには十分な技術と作法をわきまえて卒業していくわけですけども、若い人全体からみるとそれは一部です。特別な訓練を経ないと訓読は誰でもわかるというのはなかなか通用しなくなった時代だと思っています。

川合 今國學院の学生が専門的な訓練として学んでいるようなことは昔はもつと普遍的にみんなが学んでいたわけですね。今は特殊な一つの専門になってしまった。だから全体のレベルが落ちていくといましようか、読めなくなつていっていると思うのです。

赤井 今、川合先生がおっしゃった現在の日本語の骨格の一部

に訓読がなつていくということはこの木田先生もおっしゃつていのですが、私も全く同感で、それがちょっと今の日本人、意識しなさすぎる気がしますね。

川合 ただこういった訓読のないいわゆる漢文的な文体が、例えば戦争中のような、一つのある特殊な雰囲気というのか、それを伴うという面もあったわけですね。

赤井 マイナスの側面を負つていくわけですね。

川合 はい、そういうものをどう捉えるか。今、古典を復興しようと思える人の一部はそれをまた求めているわけですけども、それに対してはやはり距離を置かないといけないのではないかと思います。

赤井 訓読はある流儀作法さえわきまえれば誰でも共有できたからこそ、翻訳がなかなか発展、発達しなかったという指摘は重要なことだと思います。

川合 翻訳の場合は明治以降、西洋の言葉で書かれたものを日本語に翻訳したことによつて日本語を豊かにしてきているという功績があったわけですね。それが漢文学の場合は、むしろあまりめばしい功績がなくて、訓読に頼つてしまつたところがある。

二、訳注と翻訳

赤井 最近、日本の学術の世界では論文を書いたり、著作を書いたりするのが上位で、翻訳や訳注は研究の業績からいって二番手になってしまつて、それはおそらくどの大学もそういう傾向にあると思いますが、それが翻訳の十分な発展を見なかつたという一つの要因の副次的産物だと思います。

同時に、先生は一方では最近、訳注といひましようか、翻訳といひましようか、たくさん続々とお出しになつていて、私はず元にあるのだけをざつと整理しただけでありますけれども、これは翻訳といひていいかどうかかわからないですが、私が一番出た当初から氣に留めておりましたのは『隋書経籍志詳攷』（汲古書院）という興膳宏先生との共著でありまして、これは一九九五年七月に発行されております、これは皆さんご存じのとおり、『隋書経籍志』というのは四部分類の出発点で、目錄学、書誌学といひて良いと思うのですが、これを訳す、あるいは注釈書として詳細な訳注ですけれども、お出しになろうとした契機はなんだつたのですか。

川合 これはですね、興膳先生が名古屋大学から京都大学に

移つてこられたときに、大学院の最初の授業で取り上げられたわけですね。そのとき私はドクター二年にいましたが、ドクター三年以上はいなくて、私が学年としては一番上だったので、演習の授業の中でみんなが訳文をつくつたのですが、それを雑誌に載せるときには私が訳をつくれということのでつくつたわけですね。

この本は、実は訳といひるのは「おまけ」といひるか、なくてもよかつたようなものでして、大事なものは注のほうですね。注は興膳先生がつくられたのです。大学院の授業でこうした中国学の基礎になるようなものを取り上げられたといひことは大変な難い、いい授業だつたと思ひます。注をつくるのは大変なこと、私なんか今やれといひられても無理だと思ひます。これが大変高度な力を備えていないとこの注はできない。だからこれは訳よりもむしろ注が大事であつて、注に価値がある本であると思ひます。これに類するものは中国でも出ていませんし、大変価値のある本だといひても良いと思ひます。

赤井 私、これは大変刺激的な書物だなと思ひました。今先生は謙遜されて翻訳より注だとおっしゃいましたけれども、私なんかへそ曲がりて注から論文を読んだりすることがあるので、注といひるのは中国の学問を考える場合に非常に重要なポイ

ントだと思えますので、あとでもう一回その点については触れたいと思いますが、この『隋書経籍志詳攷』をお出しになって、ちょうど今から十年ぐらい前でしょうか、『李商隠詩選』が岩波文庫から出ましたのが二〇〇八年、そのあと続々と『中国名詩選』『韓愈詩訳注』、それから今続刊されています『文選詩篇』というふうに、非常に精力的にお出しになって、今『隋書経籍志詳攷』については注が大事だとおっしゃっています。これらいわば詩あるいは文章といつて良いと思うのですが、特に詩歌についての訳注、翻訳や注についてお考えがあると思いますが、お聞かせいただければと思います。

川合 赤井先生がおっしゃったように中国では注というのは学術的な価値が高いものであって、むしろ研究論文よりも注のほうが上ですね。注というのは一流の学者がすべき仕事というふうに考えられていると思うのです。そういうものと私の訳詩は意味が、性格が違っていると思いますが、私は日本で出ている今までのこうした訳注に不満を持っています、何が不満かというところ、まず注は用例を拾うものだという、それが注であるという誤解があると思うのです。

これは李善が先行例を挙げることによってその語の意味を示すという、そういう形の注をつくった。そのために先行例を挙

げれば注になるんだという安易な考えになってしまった。それはおかしいのではないかと。最近は電子索引が充実してきて用例はいくらでも出てきてしまうわけですよ。それを並べることは研究でも読むことでもない。それを通してその言葉の意味、その文脈の中での意味を探ることが大事なのではないかと基本的に思っています。ただ原文を訓読してそれを日本語に置き換えればそれが訳注になるわけではなくて、もっと詩の本質的なものに迫りたいというか、読み解きたいというか、そういう思いがずっとありました。

赤井 『文選』の李善注、あるいは五臣注のお話だったと思いますが、我々が注と考えると今の日本人はおそらくある言葉に対して説明したものが注だと考えます。それに対して古典の中ですと注釈というのは出典を、原拠を示す、あるいは初出の例を示すのが注釈だと考えられた時代があつて、それはかなり高度で、しかもよく理解されていない人々にとってはその注の意味合いがわかりにくいと思います。今の若い人たちはもちろん授業では『文選』の六臣注の李善注と五臣注の違いは勉強するわけですが、それが何か面白さの前に困難がたくさんありますよね、中国文学の場合。

そういう注というものに対して、新たに提起されたと思うの

ですが、私も全部を詳細に比較検討したわけではないのですが、先生の著作の中をぱっと見ますと、訳注を拝見してみても、特に『韓愈詩訳注』はポリュームが違いますし、専門的な著作です。でほかの文庫本とはちよつと意味が違つかもしれませんが、非常に刺激的だったというのは文学史における語彙の位相といえますか、アスペクトを照らし出したり、多分これが初出だろうと、そのあとはこれから出発するだろうという指摘が随所にあつて、これはおそらく研究会の中で業績の下地ができていると思うのですが、そういう意味では先生がおっしゃった六臣注などの古典的注と比較して現在の注はこうあるべきだという何かお考えはありますか。

川合 今、赤井先生が指摘してくださったこの注の特色といひましょうか、性格、これはそういうところを見てくださつたのは大変有り難いと思います。私がした『李商隱』から『名詩選』『文選』、いずれもほかの訳注と違う一つの特徴はコメントを書いているところです。補釈という名前で付けたのですが、つまり訳と注だけでは言い切れないところ、また作品の内奥みみたいなところを補釈によって示したいと。これが今までのざつとした訓読訳だけではカバーできない部分を、補釈というひとつの余分なものを付け足すことによって補いたいと思いました。

赤井先生にもお願いしている今度の明治書院の『漢文大系(詩人篇)』、こどもよい名前が思いつかなかつたのですが、詩解という名前になって、これを必ず付けるということが一つの目玉といひましょうか、従来のもとは違うということ。そういうふうになだ単に言葉の意味をその場でちよつとわかるように説明するというのは五臣注ですよ。李善注は非常に高度すぎて何を言いたいのかすぐにはわからないわけですから、それをとにかく日本語で読み解くと。そういうものを補って付けたと思います。

赤井 それは今の若い読者にとつては役に立つと思います。

川合 若い人というよりも、専門家もそうであつて、専門家もただいわば表面を読んでいるという失礼ですけども、なぜこれが詩になっているのか文学なのかということまであまり関心を持たないと思いますね。こういうふうに見ると面白いと言いたい。それが私の意図ですけれどね。

三、古典を読むということ

赤井 わかつたつもりになつてしまふのですね、専門家は。それがおそらく翻訳にもたぶん影響が出ていますね、先

ほどの古典的注と翻訳との関りでいいますと、私はすぐに思い浮かべるのは『杜甫詩注』、吉川幸次郎先生が注釈をなさり、今、興膳先生が引き続きされている、あれは膨大な注がありますね。翻訳は訓読をはるかに離れた、私は超訳と思っています。そういうふうにつまり、翻訳するためにはこれだけの注を理解したんだぞというふうな証拠を積み重ねていつて翻訳をされているように私は思ったのですが、先ほど先生がおっしゃった翻訳にご苦心された点でいうとどういふ点がありますか。

川合 私としては翻訳というのはお酒の宣伝で以前にありましたが、何も足さない、何も引かない、これが理想だと思うのです。その反対が高橋和巳さんの李商隱の翻訳でして、私の訳は完全にそれと対極にある。高橋さんはなんでもかんでも書いて散文になっている、説明しているわけですけども、私は原文からなるべく外れないようにということを心がけました。それで十分にわかるのか、詩として通用するのが課題ではありまされども、全体の方向としては足さない、引かないというふうなことを目指してはいます。翻訳の在り方は人によって違うわけですが。一海知義先生は私が考えている方向かなと思うのです。

赤井 足さない、引かないというのは、言うのは簡単ですけれ

ども、なかなか難しいですよ。

川合 そうなんです。『李商隱』みたいに、典故を存分に使って、その上で言葉をつくりあげていると、足さないのは非常に難しい。

赤井 含意が非常に多い。一つの言葉でもたくさんの意味を持たせたりすると、それを平易な日本語に訳しかえるというのは大変な作業だと思います。翻訳がやはり詩歌の場合には重要だと思っています。その翻訳に対してずっとご苦心されてきて、今対象となる詩歌や文章をどう読むかという、先生はこれまでたくさん古典を読むということに対して発信、発言をされていらっしゃいます。私はもちろん全てではないですけども、目にするものは目にしているはずですが、古典を読む行為というのは最近私が刺激的だなと思ったのは「日本中国学会便り」の1号、これは学会員に向けての便りですが、そこで先生は「読むということ」に対して、若い頃から昔の人の感性やカスを舐めるといった行為であるというふうに自己嫌悪に陥ったこともあると述べられています。それを克服されてさらに刺激的だったのは読むことを通して作品に新たな息吹を吹き込む、再創造、再び作品を創造するということを提案されて、2号で三浦國雄先生がそれに対して自分はこう思うということをそれに賛同されて

いて、私は最後の入矢義高先生の『龐居士語録』をあげていらつしやるのを大変感動的に読みましたが、翻訳するにはそれを読むという行為が必要で、読むということについて何かお考えがあれば。

川合 今紹介してくださった、読むということを再創造の行為とするというのは私の理想といましようか、かくありたいということであつて、私がそうやってきているということでは全然ありません。今の読むということの意味づけは別に中国学とか中国古典に関わらない、すべてに通用することだと思いますね。再創造のほうはかくありたいということですけれども、それよりもっと前の段階で、特に中国の古典詩文を読む場合はあまりにも中国の学術的伝統が長すぎる。少なくとも二千年以上の伝統があつて、最後は清朝考証学という完全なものになつて、そういう伝統が有難い伝統であると同時に一つの枷になつていと思うのです。それに縛られていると作品の読み方がそれに偏つてしまうのではないかという気がします。

つい最近、九州大学でのシンポジウムで話したのですが、一つの例を挙げますと、韓愈に「東方朔の雑事を読む」という詩がありまして、従来の中国の読み方は東方朔というのは当時の朝廷の悪い奴だと。誰を批判したものか、誰を想定するか、い

ろいろ説が違ふのですが、こぞつて皆朝廷のよくない人間を批判しているというように捉えるわけです。今の銭仲聯の注に至るまでそうなのです。ところが詩そのものを素直に読めば、決して東方朔を悪い人とは言っていないわけですよ。要するに彼の規格から外れた人間性みたいなものがどこにも居場所がないという悲しさみたいなものを詠っていると思うのです。それを政治批判だというように捉えるのは、詩というものは美刺（褒めたり諷したりすること）するものだという固定した枠組みに縛られて、そこから出られないためではないか、というように思つたわけです。

これもまた最近書いたもので、例をとりますと、『國學院雜誌』の論文（第120巻3号掲載）ですが、杜甫の「慈恩寺の塔に登る」という競争というか、四人ぐらいが一緒に書いた詩があります。が、それについて今の中国の人の批評は、杜甫だけが国家のことと社会のことを考えている、ほかの人は自分のことしか考えていない。だから杜甫の詩は偉いという捉え方ですね。これは人民詩人杜甫という評価からあまり出ていないわけです。そういう読み方をしているから面白くないのではないかと。僕にとつて面白いのは、ほかの人はみんな塔の上に登つて地上の様子がありありと見たというのですが、杜甫は見えないと言うんで

すよ。杜甫だけが見えないと言うのです。つまり見えるはずのもの、可視のものを不可視だと言って、逆に天界の見えないものを見えると言っているのです。北斗七星はすぐに隣にあるし、天の川の音が聞こえてくると言うのです。そういうふうに可視を不可視にして、不可視を可視にする、これが杜甫の独特のところであって、それを見ずに国家のことを憂えているから偉いというような読み方をしているから中国の古典の人氣がないのではないかと思うのです。まず再創造という前に、作品を素直に受け取るということ、それが中国の伝統が一つの障害になってできないのではないかなという気がします。

赤井 今先生がおっしゃったように中国文学は長い歴史がありますので、『詩経』から数えても三千年という、学術の進展からいっても二千年という、それが厳然としてあって、それは牢固としていいと思うのですが、そういう伝統性が研究者の発想や研究のスタンスに影響を与えているというふうに思っ、先生が読むという行為はそれでは駄目なんだと、そこに新たな意味合い、もしくは本来のといったらよいのでしょうか、真実の存在意義というものをべールをはがして研究していく作業が我々にとって必要ではないかと。そのお言葉をいただいて、これは中国古典だけに限らないと思うのですね。古典

学を標榜します國學院大學が日本の古典においても然りだと思うのです。伝統というのは重くて大事なものですけども、それにあまり寄りかかりすぎると我々は自身の批判精神や解明する努力を怠ってしまうと思います。

川合 伝統があるということはそれに頼ってしまうというか、それに頼っていれば自分も学術的に高いレベルにあるかのような錯覚を生んでしまうわけですよ。今おっしゃった國學院の学風についていうならば、折口信夫などはそういうものに全くとられない、すごい発想をしているわけですよ。そういうものが出てきたというのはほんとに不思議な、近代で天才という言葉が使えるのは唯一折口信夫ではないかと思います。

赤井 折口学あるいは民俗学もそこにはあるのですよね。全然伝統を知らないというわけではなくて、伝統をわきまえながら独自のものを出している。

四、求められる翻訳の質

川合 非常に自由な目ですよ。赤井先生、今いろんな分野に通じるとおっしゃったのですが、中国古典学の場合、あまりにも伝統の力が強くて、それにとらわれているものだから、中国

古典文学がほかの一般の文学の仲間に入れてもらえない、仲間外れなんですよ。今文学を語るとき、やはりヨーロッパ文学が中心であって、中国文学は別のものだというように排除されてしまっている。中国の古典の意義というものの、伝統とかを受け継ぐと同時に普遍的な文学の中に交えてもらいたいと僕は切実に思いますね。それは十分可能な内容をもっていて、要するに読み方が悪いというか、受け取り方が問題であって、作品自体は十分に文学としての普遍性、面白さをもっていると感じています。それを解き明かしていくのが我々の仕事ではないかなと思います。

赤井 学会でも古典と近現代は分かれていますよね。それがもう少し包括的な研究集団でないといけないと思いますね。先生が今おっしゃった世界の文学のシーンから見ても中国文学は仲間に入れてもらえないというのは残念なことで。我々研究者は、古典と現代、または作者と読者のインタープリターといったら良いのでしょうか、解釈者、仲介者であるべきだと思うのです。そういった意味で仲介者、媒介者、解釈者が十分に仕事をしていないのではないか、逆に言うのですね。

川合 そのとおりですね。
赤井 そういった意味で先生がずっとなさってきている訳注、

翻訳が非常に重要だなと思います。先ほどの読むという行為を含めてですね、大事になるんだなあと思います。

川合 赤井先生、今インタープリターという、つまり古典と今の読者をつなぐ、その中間に役割があるということをおっしゃいましたが、僕が思っていることの一つはそれなのです。つまり、同時代における平面的な関係をもつということがそれですが、もうひとつは縦の時間軸の中に我々はいるわけで、さっき私がこういうふうに読めるというふうに挙げた例も、今の時代にいる私が読んだ読み方であって、それを次の時代に伝えていつて否定されたり、そんなのは面白くないといわれたり、もつと別の読み方があるとか、そういった縦の流れも考えておきたい。つまり我々は時代の限定を受けていることがあると思います。

赤井 それはとても大事なことで、先ほど訓読や翻訳、訳注のお話が出ましたけれども、その時その時の翻訳や訳注があつてもいいと思います。『源氏物語』にいろんな訳があるように、例えば杜甫の注でもいろんな注釈や翻訳があつて然るべきだと思うし、これから若い読者にとって、魅力のある文学にしておくにはそれが不可欠だと思います。

先生のこれまでの訳注のお仕事を先ほど挙げましたが、先生

個人でなさった仕事も多いですけれども、多くの場合は研究会を通してなされていますし、先生は非常に人の輪が大きくて、しかもいくつもおもちだということは存じ上げています。研究会で、つまりみんなで詩を読むという意味ですね、それについてお聞かせいただければと思います。

五、読書会の効能

川合 要は読書会ですけれどもね、これは、僕、日本独自の伝統ではないかと思うのです。例えば五山の坊さんたちがみんな読んでいるわけですね。ひとつは外国の古典であるということ、自分一人では読めないという実際の問題があったのかもしれないが、これが江戸時代もずっと続いていて、しかも幕末になると西洋の本を同じように読書会で読破していくわけです。

これは大変得難い伝統であって、ここの文学部ももちろんそうですけども、演習という授業がある。つまり学生と一緒にみんな読んで読むということです、それが中国にも台湾にもないのです。これは非常に奇妙なことで、日本独自の伝統かなと思うのです。私も授業でもしてきましたし、授業以外でもこうした

読書会をいくつかもってきました。読書会の意義というのは外国の人も気がついて、何年前かに台湾に三カ月呼んでもらったことがありました。

そのときはなんの仕事もなく、時々ご飯と一緒に食べて読書会のやり方を教えてくれたらそれでいいというとてもいい条件だったのですが、それは日本の読書会を吸収しようとしている。ただ読書会というのは平等でないといけない。

偉い先生が一人いて、鶴の一声みたいになつたら読書会になりません。誰の意見であろうと批判する。

先ほどはふれませんでした、『唐代の文論』(二〇〇九年、研文出版)という本を私は出したことがあって、大学院の授業で取り上げたものです。そのとき、私も参加者の一人で、私も平等に担当したわけです。一応、私は教師です。しかし、私に対してみんなボンボン言うわけですよ、減茶苦茶に言うわけです。別の読書会でもやはりその連中は同じようにワートと言う



わけです。そしたら別の学校の人がビックリして『先生に対してもあんなに言うんですか』と言われましたけれど、やはり讀書会の必要条件はそれです。なんでも忌憚なく言える、平等の立場で言える、それが大事だと思います。私はそれがとても楽しいですし、そういう場にいると一人で読んでいたときには気がつかないことが思いつくという不思議な現象があって、何か刺激されるんでしょうね。それが讀書会の一面白いところではないか。自分一人では自分の中でグルグル回っているだけですけれども、ほかの人が何かを言うと、それが契機になってまた別のことを考えつく、それがまたキャッチボールみたいに行き交うという、讀書会というのはこれからも日本が大事にしているべきものではないかと思えます。

赤井 國學院の文学部、特に日本文学科や中国文学科、史学科などはだいたい教員がひとつ研究会をもつて週に1回は学生たちと一緒にいろいろなものを読む機会があります。ただ学生と教師という遠慮があって、今先生がおっしゃったような関係が構築できているところは必ずしも多くはないと思うのですが、それが非常に大事だということは、川合先生と私が深く関わってまいりました中唐文学研究会などは特にそういう傾向があった、関東と関西で研究会をそれぞれ開いて、それは同僚という

仲間ですので本当に忌憚のない批判を受けて新たな読みというものをできないかということを検討してまいりました。

川合 中唐文学会、あれは赤井さんと一緒に始めたわけですが、あれども、あのとき最初に決めたのは会長は設けないということと、50歳定年制という、つまり同じ世代だから同じように言えるだろうと考えました。老先生が来て、ひと声で決まってしまうようにはしたくないというので老人を排除したわけですね。あれはよかったと思います。

赤井 それが先ほど言った伝統があるということは有難いことではあるけれど、それが手かせ足かせになつてしまう恐れがあるということに通じる発想だったのですね。おそらく老先生から見たら、生意気な奴らだと思われたに違いないと思いますが、それが逆に刺激的でしたね。

川合 今でこそ、赤井先生が理事をされている日本中国学会が若手をなんとか入れる発表を促していますけれども、当時若手は全く出る幕がなかったですよ。だから我々はそれを欲したわけですね。

赤井 その後、日本中国学会を母体に六朝学術学会ですとか、中唐文学会ですとか、宋代文学学会とかができました。そういう意味では細分化した研究が進んでいるように思います。我々

はとりわけ古典文学を教授し、自分でも研究する立場にありますが、その立場からすると、従前と比べて今の若い人が読書離れといってしまうか古典離れ、これは中国文学に限りませんけれども、いわれていて、実際年間に読む本の数等がデータで出ていまして、これではいかんというので、國學院大學では本を読む企画を全学的にも「みちのきち」（学内にある読書空間）をつくったり、ラーニングコモンズを設けたりしています。だからといってすぐに学生たちの読書離れが直るとは思わないですが、先ほどおっしゃった翻訳ですとか訳注というのは私は専門家も含めて、一般の読者に受け入れられると思うので、すぐに呼び戻せるかどうかはわかりませんが、その辺、実際に教壇に立たれて今の学生たちでしょうか。

川合 今これは広く世界中だと思えますけれども、古典というものが遠のいていて、サブカルチャーが非常に大きなシェアをもつようになった。例えばヨーロッパでも昔は必修であったラテン語がもう必修ではなくなったような古典離れが全世界的に起こっているわけですよ。その中でこうしためんどくさい漢字が並んでいる中国の古典を「読め読め」といっても無理であって、全体読書の質というか、読書人というのが、別に日本だけということではなくて世界中どこでもそうでしょうか。

ども、そういう読書の文化のようなものが昔より衰退していると思うのです。私たちの学生時代を考えても時代の違いははっきりわかるわけで、つまり僕らのときは本しかなかったけれど、今は音楽とかネットとかたくさん媒体があるわけで、読書がその分減ったということはあると思うのです。

ただ私は本とか文学とか、これが人間の世界からなくなることはないと思っています。人間が言葉を使って感情をもつ動物である限り、文学は減びないだろうと。しかし、地盤沈下していつてしまうのは寂しく悲しくなるのですが、これは赤井先生のご意見ですけれども、いいものを出せばそれによって読者たちは改革できるといいでしょうか、常にいる読者をひきつけるだけではなくて新しい読者をつくっていく、本にはそういう働きもあるのではないか、しなければいけないのではないかと思っています。

六、古典に親しむ

赤井 先ほど紹介した先生の訳注類を拝見すると、特に文庫本などは流布性も高いですし、値段もそんなに高くないということ、おそらく今先生がおっしゃった新しい読者の開拓には十

分に効果があるのではないかなあと思っています。

川合先生と私は2歳違いで2人とも年寄りですけれども、私どもが学生の頃は中国に行くということは考えもつかなかったですね。しかし関心が高かったから、例えば『人民日報』とか『光明日報』とかを週に1回借り出して見て目を皿のようにして情報を追っていましたね。そのうち4人組の事件が起きて、そういう大事件が起きたんだということを肌身でわかる。

今のよう情報に洪水のようにありますので、それから見ると今ははるかに中国は近くなっていますよね。近くなっているけれど、今の学生たちの距離感からいつたら昔より遠いような感覚を私は受けるのですが、その魅力ある中国文学や中国文化に対して、どうしたらその魅力を伝えられるかというと、ひとつには良質な翻訳、わかりやすい解釈があると思います。先ほどの訓読の話もそうですけれども、面白さの前に困難さはどうしてもあるものですから基礎的な訓練だけは知っておかないと面白さには行かないよと学生たちには言っています。最初に面白さをわからせてあげるといいと思うのですけれども、その点については先生はどのようにお考えでしょうか。

川合 全体として軽いもの、安易なものに流れていますよね。赤井先生がおっしゃったと思いますが、漱石や鷗外ですらいま

や注釈がないと読めないというようになってしまつて、日本語のレベルが低くなっているといましようか、それは日本語教育というか、国語教育が非常に軽んじられている。

聞くところによると、国語の教科書はどんどん古典離れ、文学離れしていて、実用的な日本語だけで良いというような方向になりつつあるらしいです。これは大変由々しき問題であつて、国語というのは、例えば今メールでやり取りするような簡単な日本語ではなくて、もつと格調の高いものを読まなければいけない。それを国語教育でやらないといけないと思うのです。そういう考えが皆さんに共有されればすぐにできることであつて、国語教育の充実ということ、まずこれをやっていただきたいですよね。そうすれば訓読でももつと入りやすくなる、もつと馴染みが出てくる、近いものになってくると思うのですけれども。

赤井 私も昔、高等学校の教科書の編集委員を十数年やった経験がありまして、それで申し上げますと、先生がおっしゃるとおり、今の義務教育から高等学校にかけての国語の時間がどんどん減ってきました。今少し戻すように全体で働きかけているのですが、多少戻っても全体としてはやはり少ないですね。我々が高校のときに勉強した時間数に比べたら半減していると思ひ

ます。ですから勢い、取り上げる対象も少なくなりますし、準備性といえましょうか、大学に入ってきたレディネスが極めて薄弱ですね。ですから昔ですと入ってきたときにある程度漢文も古文もやってきたから古典文法はおさらいぐらいで済む。ところが今は大学に入って最初から勉強するような学生を受け入れるように先生方にはお願いしているところです。

川合 赤井先生が、教科書をつくってこられたというのは知らなくて、それで言うのは失礼ですけれども、私は以前、事情があつて国語の教科書を調べたことがあります。そのときに気が付いたのは、教科書が生徒に迎合していると思ひました。つまり、タレントの文章などを載せているわけですね。サッカーの選手が引退してそのことを書いたときに教科書会社はどこも奪い合いだったのです。しかし僕から見るとあの文章は自分が書いたものではない、あるいは書いたとしてもありきたりのことを言っているだけで、とても教科書に載せるべきものではない。そういうように教科書自体がちよつと低下しているのではないかなと。

赤井 それはですね、ひとつは編集と営業の力関係ですね。営業のほうはこれだけは入れてくれと。漢文でいうと「長恨歌」はぜひ入れてくれと。授業ではやりきれないからいらないので

はないかと言つたのですが、これがないと売れないというわけですね。そういう営業の戦略があります。

川合 有名なタレントとか有名選手の文を入れたら売れると。採用されると思うわけですか。

赤井 古典のほうにあまりそういう力関係は働かないですけれども、それでも今言つたようにありますね。ですから、國學院大學は特に国語を大事にしているということで基礎日本語という科目に力を入れています。

川合 それなんです。僕、京都大学にいたときに何度も提言したのは教養部に日本語の授業を日本人向けにつくるべきだと。外国人用の日本語の授業がなかったのです。外国の英語圏の大学の場合は、英語の授業が必ずあつて、つまりきちんとした英語が書けることが大学を出た人の資格なんです。日本でそれがないのはおかしいと言つたわけです。國學院でそれをやつておられたというのは驚きです。

赤井 私が学長に就任してすぐ、それに力を入れました。

川合 それはぜひ続けてほしいですね。

赤井 それで古典を勉強する、漢文を勉強するという学生が少しでも増えてきて欲しいと思つています。

川合 基礎ですからね。

赤井 きちんとした日本語をマスターした学生たちを世に送り出していく、それが國學院のミッションだと思っています。

川合 全く同感です。

赤井 これまでいろいろお話を伺ってきましたけれども、國學院大學は読書をしようという動きですとか、今言ったような日本語を大事にしていこうという動きをしています。学生たちはそれを支持してくれたと思っていますので、今古典離れ、読書離れが多くなっているとは思いますが、そういう学生が増えていった状況を変えてくれることを切に祈っています。

川合 そういう点ね、赤井先生の方針というか、理念というべきか、それが國學院大學は割りかし可能というか、開けていくと思います。国立大学だとそういうことは通らないと思いますね。だから國學院ならではの利点をぜひ生かしていただきたい。

赤井 そうですね。先生方の理解も深いですし、駄目だとか言うことではないので、体制をきちっと整備すれば協力はいただけると思います。

川合 簡単に言ってしまうと、国立大学は今、理系主導なんです。そういう人たちは文学部は必要ないと言っている。

赤井 ぜひ人文社会科学系の標となる大学、大学の個性と特

性を旗幟鮮明にしていきたいと思っています。

川合 そういう意味では非常に存在意義があると思います。

赤井 川合先生に伺いたいことは、大体尽きたようです。本日は、ありがとうございました。

